

平成 23 年度

越前おおの地域づくり交付金事業

各地区実施報告書



平成 24 年 4 月

大 野 市

目 次

1	大野地区まちづくり推進協議会	1
2	下庄をよくする会	5
3	乾側をよくする会	8
4	小山をよくする会	13
5	上庄をよくするつどい	17
6	富田地区むらづくり運動推進協議会	22
7	ふるさと阪谷をよくする会	28
8	五箇地区むらづくり推進協議会	33
9	和泉自治会	38

大野地区まちづくり推進協議会

1 基本データ

○地区名

大野地区

○地区人口

14,664人(平成23年10月1日)

○面積

6.3平方キロメートル



亀山の頂に建つ越前大野城

○地区の沿革

大野地区は、大野盆地の北西部の平坦地に位置し、東は上庄地区に接し、南は小山地区と上庄地区、西は乾側地区と小山地区、北は下庄地区に接していて、政治・経済ともに大野市の中心である。

古代より中世初期にかけては、政治経済の中心は小山地区や乾側地区にあり、大野地区は荒涼とした原野に数村が所在していたと考えられている。

中世中期には、亥山城(現在の日吉神社付近)の周辺に小規模な城下町が形成されていたが、今から430年前、天正期に金森長近が大野城を築城し、新しく建設した城下町が大野地区中心部の街区や用排水路

の原型となっている。



名水百選「御清水」

明治4年の廃藩置県により大野藩は大野県となったが、その年のうちに福井県、足羽県とめまぐるしく変わった。県名はその後明治6年に敦賀県、明治9年に石川県と変遷したが、明治14年に再び福井県となって現在に至っている。

足羽県地理誌によると、廃藩置県当時の大野地区は戸数2,083戸、人口9,052人であった。

明治22年の町村制施行により、5つの小区がまとまって大野町が誕生した。大野町は、昭和29年の町村合併により大野市の一地区となって現在に至っている。



400年の歴史を誇る七間町

○実施主体

大野地区まちづくり推進協議会

2 現状と課題

大野地区は、亀山にそびえる越前大野城、碁盤目状に区切られたまち並みや寺町通り、城下町誕生のころから続くとされる七間朝市など、400年を超える歴史の昔を彷彿とさせる景観を今も色濃く残している。

広大な森林を持つ本市は湧水が多く、当地区には名水百選にも選ばれている「御清水」をはじめとする湧水地がいくつもあり、古くから地下水を生活用水として利用してきた。この地下水は、現在でも多くの家庭が飲み水などに利用しており、この地ならではの豊かな水文化を育んでいる。



平成の名水百選「本願清水」といとの里

当地区の「歴史・文化・伝統・水に育まれた城下町」を魅力として、市ではまちなか観光を推進しており、当地区への観光入込み客数は増加傾向にある。

しかし近年、車社会の進展や大規模小売店舗の郊外立地に伴って、人口が市街地から郊外等へ流出しており、市街地では商業活動の衰退、後継者不足等により空き店舗や空き地などが増加している。

こうしたことから、市では平成20年度に中心市街地活性化基本計画を策定し、交流人口の増加、居住環境の向上、商店街の活性化などに取り組んでいる。



400年の歴史を誇る七間朝市

一方、当地区は区域の大半を市街地が占め、また城下町を中心に発展した歴史などから、他地区のような「むら社会」の側面が無く、地区住民の多くは「大野地区民」としての連帯感、責任感が希薄であり、まちづくり活動への参加意識も極めて低い。

以上のようなことから、本年度は地区住民の連帯感の醸成と来訪者へのホスピタリティ向上を課題として、地区のシンボル「亀山」の魅力アップに取り組むこととした。



寺町

3 事業の内容

亀山東側緩斜面の整備として、百間坂エントランス道下の雑草地となっている緩斜面を芝生の植栽や斜面の部分的なオープンカットにより「ちびっこゲレンデ」や「お花見広場」として整備した。



また、百間坂エントランス道周辺に亀山の魅力を発信する看板を3基設置し、今年度は亀山に自生する草木を紹介している。



ほかにも亀山の植物観察会を開催するとともに、亀山を散策する人たちに利用してもらえるよう亀山の植物紹介冊子を作成した。



観察会オープニング



指導者の話を熱心に聴く参加者



4 事業の成果

亀山の百間坂エントランス道周辺にハナモモなどの植栽や芝生広場を整備し、亀山の魅力アップに寄与することができた。

亀山魅力看板を3基設置し、亀山の樹木や草花を紹介するプレートを掲示して亀山の魅力を発信することができた。

亀山の植物観察会を開催し、地区民の亀山に対する愛着を醸成することができた。

亀山の植物を紹介する冊子を作成し、散策する人たちに貸し出して、亀山の植物に対して興味を持ってもらうことができた。



5 今後の展望

百間坂エントランス道下の斜面整備と亀山の植物の観察会を継続し、亀山の更なる魅力アップを図るとともに、柳神社境内のお馬屋池周辺を整備し、市が整備を計画している義景公園から御清水、新堀清水とあわせ、亀山に至るまでを観光周遊のルートとして確立する。



名水百選「御清水」

下庄をよくする会

1 基本データ

- 地区名 下庄地区
- 人口 9,152人 (平成24年1月)
- 世帯数 2,914世帯 (平成24年1月)
- 地区の沿革

下庄地区は大野市の北西部に位置し、昭和29年に2町6ヵ村が合併して大野市が誕生した時に、下庄町も大野市に編入されました。当地区は勝山市と隣接していて、奥越地区全体から見ると中心地域として、県立高校、警察署、土木事務所、奥越合同庁舎、健康保養施設(あつ宝んど)、郵便局等の官公庁等が集中しており、近年、複数の新たな商業施設も立地しています。

また、中部縦貫自動車道の大野ICも当地区に建設され、国道157号大野バイパス(東縦貫線)も建設されています。

- 実施主体 下庄をよくする会

2 現状と課題

○現状

- ①市街地に隣接しているため、地区内は農家と非農家が混じり合っています。
- ②地区内の行政区や各種団体は、既に様々な地域づくり事業を、活発に行っています。
- ③新たな幹線道路に隣接した堂本では区民による地場野菜の販売所開設が見られ、矢では独自にカタクリや桜を中心とした公園整備やイベントの開催、陽明町では古くから伝わる不動明王と御堂の建替事業などのそれぞれの資源を生かした地域づくり事業を行っています。

○課題

- ①地区内では、新たな幹線道路、商業施設等に隣接し、人の往来が多くなる地域と、現

状では人の往来の増加を望めない地域があり、区民の地域づくりに対する意識の違いがあります。

- ②地区民が交流することで、団結力を高め地区内を元気することを目的に毎年10月、「下庄まつり」を開催しています。毎年、地区内外から多くの人を訪れています。



まつりでは、地場野菜を販売する「青空市」や地区民による「フリーマーケット」が開かれ、好評を博しています。



- ③下庄をよくする会では、地区内の33区毎に「地区推進委員」を選任してもらい、各区とのつながりを大切にしていますが、会議や活動への参加率は低く、一部の委員への偏りが多くなっています。

3 事業の内容

平成22年度において整備を行なった、地域づくり拠点施設「下庄青空市」での地場野菜等の販売に必要な備品を整備するとともに、

出品者や地区推進委員等との連携による体制づくりを行い、地場野菜等直売所の定期開催を行います。また、この施設を利用して地区民の交流イベントや、子ども達の販売体験などの事業を企画しながら、周知を図るための啓発活動を進めていく予定です。

4 事業の成果

①本年度においては、地場野菜の販路と地区民への提供を事業の中心として取り組み、販売に向けた施設と運営体制の整備を行い、6月26日に直売所「下庄青空市」をオープンし、以降11月27日までの毎週日曜日、午前8時から12時まで定期的な開催を行ない、基本的な運営体制を築くことができました。



②農産林物の出品者を主体とした「下庄青空市運営協議会」を立ち上げたことにより、「下庄青空市」が地域の拠点施設として機能し、地区民の交流の場を創出することができました。協議会では、運営に関する話合いのほか、視察研修なども行いました。



③下庄地区社会福祉協議会の主催で、子ども達が農業体験を行なっている世代間交流事業の圃場「下庄っ子農園」で栽培した、野菜の一部を試験的に販売しました。

④オープンに向け、機関紙や区長、地区推進委員等を通じ農産物の出品者の募集を行うとともに、ポスターやチラシによる広報、また近隣スーパーとの連携による広報により、地区民に事業内容をPRすることができました。



5 今後の展望

平成24年度においては、ハード的な面では、拠点施設「下庄青空市」での販売において、今後必要となる施設の整備と備品を追加していく

予定ですが、これと平行して、ソフト的な面では、①運営体制の安定化を目指し、出品参加者数の増加を図る、②地域と連携したイベント等を企画する、③将来に向けた加工品の生産について検討するなどについて積極的に取り組んでいく予定です。

地域づくり拠点施設「下庄青空市」のより効果的な活用により、「下庄をよくする会」の持続的な発展と、中部縦貫自動車道の開通を見据えた中での下庄地区の活性化につなげていきたいと考えています。

乾側をよくする会

1 基本データ

○地区名 乾側地区

○地区人口 1,031人
(平成23年7月1日現在)

○面積 10.51km²

○地区の沿革

乾側地区は、市街地の西部に位置し、地区西端にある花山峠を境に福井市に接し、地区中央の東西を国道158号線が横断しており、大野市の西の玄関口となっている。

8集落からなり戸数約230戸で、酒米と種粃産地として有名な純農村地域である。

○実施主体

乾側をよくする会

2 現状と課題

乾側地区は縄文時代から人々が住み始め、大野でも最初に開けた場所のひとつである。弥生時代や古墳時代には牛ヶ原を中心に大きな力を持った豪族が現れ、乾側地区内に多くの墓や古墳が作られた。中でも牛ヶ原の山ヶ鼻古墳群には奥越で唯一の前方後円墳があり、鉄剣や貨幣（和同開珎）も見つかっている。なお、大野盆地内の古墳のうち6割以上が乾側地区に集中している。

また、稲作が始まり、奈良時代には寺や貴族・豪族の土地である荘園が発達したが、牛ヶ原の荘園は、奈良時代には奈良東大寺領、平安時代には京都醍醐寺領として、今の大野市街地の北半分にまで広がっていた。その牛原荘には後に牛ヶ原城が築かれ、三社神社が建立された。なお、尾永見区には、稲作に縁の深い雨乞い踊りが無形民俗文化財として継承されている。

さらに、南北朝時代に築かれた戌山城は、金

森長近によって越前大野城が築かれるまで、戦国時代の激動期を含め200年余りの間、大野とその周辺地域を治める斯波氏、朝倉氏の居城として、県内2番目の多さの畝堀数と奥越最大の規模を誇る山城であり、一乗谷城の東方面の軍事拠点として重要な役割を果たしていた。

このように、乾側地区は古来、大野盆地の中でも最も歴史と伝統のある地域であるが、地域住民自身はその認識が薄いの実情である。

3 事業の内容

①牛ヶ原城址登山道の草刈等の実施

日時 6月5日(日)午後1時～4時

参加者 地区民13名が参加

内容 牛ヶ原城址登山道整備作業に向けて、まず、その第一歩として、地域住民らが草刈り・簡易な雑木伐採作業を実施した。



簡易な雑木を伐採



草刈り作業

②みくら清水～戌山城址～飯降山接点間登山道
整備の実施箇所の確認

日 時 8月3日(水) 午前8時～正午

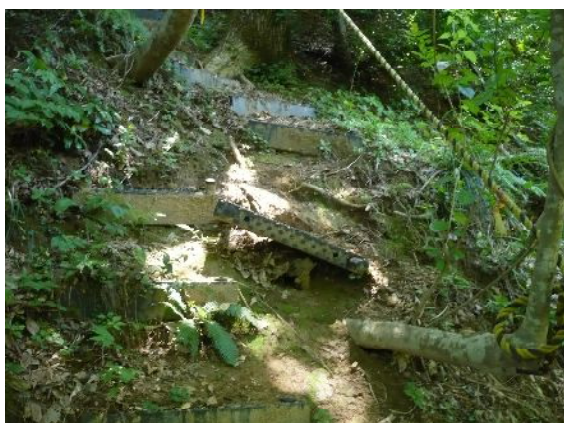
参加者 よくする会会員3名、九頭竜森林組合
1名、他2名

内 容 戦国時代、攻め込む敵を防御するための「堀切」や「土橋」「曲輪」など、弥生時代の古墳群が残る登山道である。

本格的な整備に向けて、古墳などの史跡を破損しないよう留意しつつ、登山道を歩きやすいようにするため、雑木伐採箇所の確認や勾配の急なところに設置する階段・ロープの設置箇所と既存の階段補修箇所の確認作業を行った。



登山の妨げとなる雑木にテープで目印



既存階段の状況

③牛ヶ原城址登山道整備の実施箇所の確認

日 時 8月10日(水) 午前8時～正午

参加者 よくする会会員1名、九頭竜森林組合

1名他1名

内 容 牛ヶ原城は、鍋床山にあり、牛ヶ原荘の地頭淡川右京亮時治の城跡と推定されている。

本格的な整備に向けて、登山道を歩きやすいようにするため、雑木伐採箇所の確認、勾配の急なところに設置する階段や補修箇所などの確認作業を行った。



新規階段の設置箇所にテープで目印

④みくら清水～戌山城址～飯降山接点間登山道
整備の実施

日 時 10月16日(日) 午前8時～正午

参加者 地区住民34名

内 容 総延長 1,700メートル

○新規階段設置 6箇所 209段

(延べ約70メートル)

○階段補修 6箇所(延べ約75メートル)

○ロープ設置 2箇所(延べ約23メートル)

昨年度は、登山道入り口付近に、駐車場や案内板を設置。

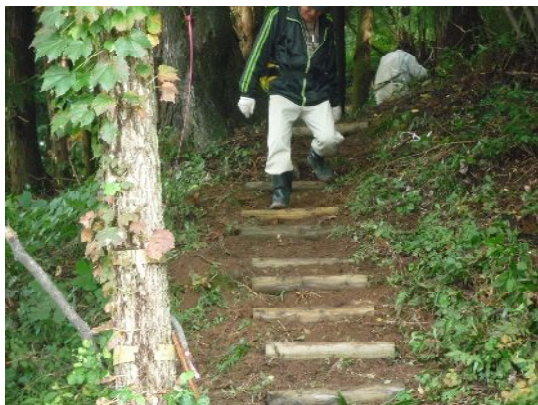
本年度は、地域住民参加により、入り口付近の「みくら清水」から戌山城址跡を経て、飯降山の登山道へつながるまでの、約1,700メートルの整備を行うことができた。



新規階段の設置作業



新規階段の設置作業



新規階段設置後の風景

⑤牛ヶ原城址登山道整備の雑木伐採作業

日 時 10月28日(金)

午前8時～午後5時

内 容 雑木伐採作業 約30本

九頭竜森林組合に委託

登山道を歩きやすくするため、雑木伐採作業

を実施した。



雑木伐採作業



雑木伐採作業

⑥牛ヶ原城址登山道整備の実施

日 時 10月30日(日) 午前8時～正午

参加者 地区住民27名

内 容 総延長 200メートル

○新規階段設置 3箇所 21段

(延べ約15メートル)

○階段補修 1箇所 (約31メートル)

○歩道整備 3箇所 (延べ37メートル)

昨年度は、登山道入り口付近に、案内板等を設置。

地域住民参加により、ふるさと林道参道口から、牛ヶ原城址までの登山道、約200メートルについて整備を行うことができた。



登山道歩道整備作業



雑木伐採作業



登山道歩道整備後の風景

⑦みくら清水～戌山城址～飯降山接点間登山道の雑木伐採作業

日時 10月20日(木)～11月7日(月)

午前8時～午後5時

内容 雑木伐採作業 約160本

九頭竜森林組合に委託



雑木伐採作業

4 事業の成果

牛ヶ原城址登山道及びみくら清水～戌山城址～飯降山接点間登山道整備を地域住民自らが地域づくり活動に汗を流すことにより、「地域力」の高まりを図ることができた。

これら一連の事業への取り組みを通じて、地域内に貴重な文化財が存在することを再認識し、地域への愛着や誇り、ふるさと意識が高揚され、地域の史跡を整備・継承していくことを通じて、自らの手で地域をさらによくしていこうとする地域づくり活動の活性化に繋がった。

5 今後の展望

来年度以降は、さらに史跡に触れる機会を増やすことを目的として、三社神社跡地への登山道整備を実施する。

また、戌山城についても、上丁～向山間（戌山城址と飯降山接点との中間地点）の新規登山道を開拓・整備する。

地権者の理解を得ることや整備作業従事者の確保、登山道整備により古墳や史跡を損傷しないよう、その保存に充分配慮しながら整備を進める必要がある。

登山道整備完成後には、史跡・文化財の活用や来訪者増加のための方策に知恵を出し、工夫

を凝らしていくとともに、事業を通じて向上した地域の魅力を積極的に発信していきたい。

なお、平成22年度において「雨乞い踊り」のための太鼓・笛・法被など必要備品を整備し、文化祭などの機会を捉えて発表を行った。

今後も、敬老会など更なる発表の機会を持ち、継承の取り組みの活発化を図っていきたい。

小山をよくする会

続：歴史と文化を活用した地域づくり
～ふるさとを誇る住民意識の啓発事業～



赤枠で囲われたところが小山地区

1 基本データ

大野市小山地区は、人口約2千人、世帯数は約650戸。15の集落で構成される緑豊かで自然にあふれた農村地域です。

面積は、東西2キロメートル、南北4キロメートルの約8平方キロメートル。その位置は、大野市の南西部、市街地に隣接し、大型ショッピングセンターなどの商業施設が立地しています。

その歴史は古く、地区内を南北に縦断する赤根川流域を中心に縄文時代から人が住み着いており、大きな勢力を持っていたと思われる豪族の古墳がいくつも存在しています。

平安時代には藤原氏の荘園となり、その後、京都の春日大社と深い繋がりを持ちながら、現在まで、地区有数の農村地帯として発展してきました。

本事業の実施主体は、地区内全戸を会員とする小山をよくする会です。

事務局を小山公民館に置き、地区内から選出された会長1人、副会長2人と、各集落の代表として選出された推進委員45人で話し合いを行いながら、明るく豊かで住み良い地域づくり

を目指して活動しています。

2 現状と課題

小山地区は、大野市内でも有数の歴史を誇る地域です。

公民館の歴史講座を受講したことをきっかけに、平成18年頃に地域の歴史を学習するグループが生まれ、地域史の掘り起こし活動が行われてきました。

しかし、地区住民の多くに、地区の歴史に関心をもっていただく活動を広げていくことは簡単なことではなく、地域住民の地域の歴史に対する関心はそれほど高くなっていないのが現状です。

そこで、平成22年度に始まった「越前大野地域づくり交付金事業」を活用して、地区の歴史と文化を活用した地域づくり事業を行うことにしました。

事業を実施するにあたっては、二つの目的をたてて計画しました。

1つは、地域の歴史や文化を掘り起こし、地区住民にお知らせしていく「歴史と文化の里づくり事業」。

もう1つは、地域が一丸となれる地域を醸成するため、地域コミュニティづくりを支援しようという「地域コミュニティ支援事業」です。

平成23年度も、前年度と同様に、この二つの事業に取り組みました。

3 事業の内容

①歴史と文化の里づくり事業

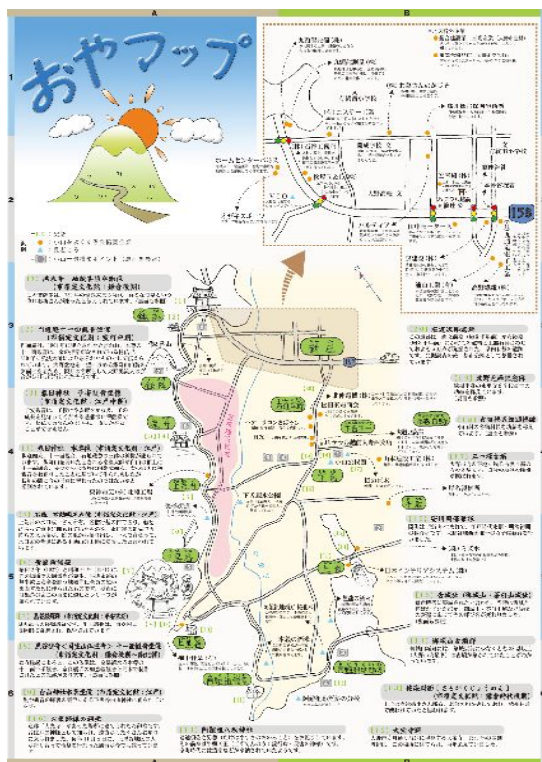
この事業としては、3つのことに取り組みました。

1つ目は、地区の歴史と文化をわかりやすく表現したデジタル地図の制作です。

地域づくりを目的とした地図は、通常、紙資

料として印刷をして、地区全戸等に配布するという事業が多いように思いますが、私たちは、地図をデジタルデータとして制作しました。

地区の史跡情報とともに掲載した、変わり行く地域の文化情報の更新が行いやすい地図にしたいと考えたためです。



小山地区を紹介するデジタル地図

デザインや挿絵は地区在住の方の協力を得ることができました。

地図面の裏側には、小山地区の歴史や民話等を紹介する読み物を掲載しました。

このデジタル地図は、インターネットを通じて、ホームページ (<http://ono-city.jp/oyamap/>) から誰もがいつでも閲覧・印刷できるようになっています。



地図裏に制作した読み物面

もちろん、地図データは、印刷業者できれいに印刷することも可能です。

印刷後は、折り畳むことにより、コンパクトな地図として使用しやすいデザインになっています。

紙資料として、地図を活用すべきタイミングが訪れ、印刷するための財源が出来た折には、即座に紙資料として印刷して活用できます。

将来、この地図が、多くの人に活用され、地域活性化の一翼を担うことに期待をしたいと思います。

2つ目は、史跡探訪ツアーの実施です。

ツアーは、6月5日（日）に実施。



史跡巡りウルトラクイズの様子

あまり地域の歴史に関心のない人も参加しやすいようクイズ大会形式で実施しました。

コースは、昨年度の地域づくり交付金事業で設置した史跡看板がある場所を中心に巡るようにし、14名が参加しました。

参加者が思ったより少なかったのは残念でしたが、昨年設置した史跡看板の状態を確認しながら、楽しく小山地区の歴史を学ぶことが出来ました。

3つ目は、歴史講演会です。

公民館とタイアップし、昨年度に引き続き、元福井県埋蔵文化財調査センター所長お青木豊昭氏をお招きして行いました。

講座には、32人が参加。



歴史講座の様子

6月に青木氏が行った史跡の現地調査により明らかにされた、上舌地区にある「舌城址」の歴史的価値について学びました。

これら3つの事業の実施により、小山地区の価値ある歴史について、多くの住民の皆さんに知っていただく場を提供することができました。

②地域コミュニティ支援事業

平成23年度の地域コミュニティ支援事業は、地区住民に呼びかけ、事業企画を公募することになりました。

公募は平成24年1月から3月上旬の期間で行い、小山をよくする会の役員や区長会を通じて各地区に呼びかけたほか、公民館に協力をいただき、広報誌でも募集しました。

その結果、5地区と1団体から、想定していた金額を上回る企画の申請がありました。

事業予算想定額を上回ってしまったため、事業の審査を行う必要がでてきたのですが、各事業において、想定額を上回る金額が高額でなかったことが幸いし、各申請団体と話し合いのうえ、事業予算の減額と内容の見直しを行うことで問題は解決。申請のあったすべてを実施する方向で市に事業申請を行い、採択していただくことができました。

阿難祖地頭方地区では、以前、住民の協力により造成していたビオトープの水車が壊れてい

たため、その修繕を行いました。



阿難祖地頭方区の水車修繕

阿難祖領家地区では、地区のまつりが行われる牛頭神社への道をコンクリート舗装し、高齢者の方や障害を持たれた方でも車椅子等で危険なく参加できるようになりました。



阿難祖領家地区の道路舗装

下黒谷地区は、地区集落センター広場の雑草地を、コンクリートで整地する事業を行いました。

下黒谷地区の集落センター広場の整備



千歳地区は、地区集会センター広場の雑草地に芝生を植栽しました。



千歳区の集落センター広場への芝生植栽

右近次郎地区では、小山地区の幹線道路沿いとなる生活改善センターの花壇が古くなったため、花壇の改修を行いました。



右近次郎地区の花壇整備



キッズフェスタの様相

事業は、行政区としての取り組みだけに留まらず、住民有志で結成したキッズフェスタ実行委員会による、地区内外の方との交流を目的と

した「キッズフェスタ」も開催されました。

4 事業の成果

①歴史と文化の里づくり事業

史跡看板を活用してのツアー企画は、昨年度の取り組みを有効活用できた企画となり、昨年度の事業の意義を高めることができました。

また、今年度制作したデジタル地図は、看板と比べ、場所を選ばずに見ることができるため、地区住民が、地区の歴史や文化に対してより気軽に関心を持っていただけるツールになると思います。

それぞれの事業により、地区の歴史に関心を持っていただくための環境を整えることができました。

②地域コミュニティ支援事業

初めて地区住民から事業企画を公募し、意欲のある地区や住民を支援することで、効果的に地域コミュニティづくりを行うことができたと考えています。

また、地区のニーズが反映された多種多様な取り組みが生まれたことも大きな成果であると思います。

5 今後の展望

2年間、継続して同じテーマに取り組んだ結果、「歴史と文化の里・小山」づくりを意識する住民が徐々に増えてきました。

現在、この事業とは別に、前述の歴史学習グループが、地域の歴史を掘り起こし、その結果を冊子にしようという動きも出てきています。

地域コミュニティが活性化し、このような地域での自主的な地域づくりの機運がもっと出てくるよう、小山をよくする会として、今後も粘り強く地域づくりに取り組んで行きたいと思いをします。

上庄をよくするつどい

1 基本データ

- 地区名 上庄地区
- 地区人口 約4, 200人
- 地区世帯数 約1, 100世帯
- 地区面積 28, 471[㊦]
- 地区の沿革

大野市は、昭和27年に2町6カ村が合併し市制を施行したが、6カ村の中の1つ旧上庄村が現在、上庄地区と言われている。

当地区は、32の集落（行政区）で構成されていて、地勢的には市街地南部に位置し、日本百名山の1つ荒島岳のふもとで、東西約6[㊦]、南北約12[㊦]ほどの広さを有している。地域は、一級河川の真名川と清滝川が作り出した扇状地形で、稲作とサトイモの生産が盛んな農村地区となっている。



- 実施主体 上庄をよくするつどい

地区のまちづくり組織「上庄をよくするつどい」は、地区内の全世帯のほか、関係機関や関係団体で構成されている。その運営については、各集落から選出された運営委員があたり、総務部、環境整備部、教育福祉部の3つの専門部に分かれ、それぞれの部門の事業を行っている。

また、毎年このよくするつどいを核として実行委員会を構築し、地区の夏祭りを8月の第1

土曜に実施している。夏まつりは地区住民による手づくりで、地区公民館の駐車場を利用して各種の団体やサークルなどが、日ごろの練習成果を屋外ステージで発表、また唐揚げや焼きそば、焼き鳥、バザーなどの出店もあり、地区民からは夏の恒例イベントとしての楽しみの一つに挙げられている。

2 現状と課題

(1) ふれあい電話帳作成事業

上庄地区には、以前より地区限定版の電話帳があり、全世帯に配布されている。

本電話帳には、集落ごとの世帯の電話番号の外に、地区内の公共施設、市の福祉サービス、無料相談等の連絡先の掲載もあり、地区住民には非常に好評であった。

しかしながら、作成して12年が経ち掲載内容が古くなったことや、今後、高齢者世帯や一人暮らし世帯が増えることが予想される中で、地区住民が安心して暮らせるよう新たな情報が掲載された改訂版の電話帳作成の要望の声があった。

(2) イベント備品整備事業

上庄地区では、上庄をよくするつどいを中心にこれまでも各種団体が、毎年、種々の事業に取り組んでおり、地域内の世代間交流や地区活性化に努め、地域の賑わいづくりを図ってきた。

特に、地区の一大イベントである地区夏まつりは、前述したとおり、毎年、実行委員会を組織し、地区住民の手づくりによる夏まつりを実施し、毎年多くの来場者で賑わっている。

また、地区体育大会や敬老会も秋の収穫繁忙期にもかかわらず多くの参加者が集い賑わいを見せている。

しかしながら、使用備品は老朽化や借用備品が多く、イベントの拡充や新たな企画、提案が

出来ないこともあり、実行委員会等では備品整備の要望があった。

(3) 登山道周辺整備事業

広大な山林を抱える当地区は、銀杏峰や荒島岳をはじめとする美しい山々があり、登山シーズンには多くの登山者が訪れ、地域の賑わいを見せている。

銀杏峰には、毎年700人から800人もの登山者が登ると言われ、出発点である麓の宝慶寺いこいの森などは、シーズンになると多くの登山者で賑わっている。

しかしながら、山頂までは約3時間かかることから、途中、水飲み場や休憩所の要望があった。



銀杏峰登山コース

3 事業の内容

(1) ふれあい電話帳作成事業

作成にあたっては、従前の電話帳を基に、今回も世帯電話番号の外に、区民が日常必要とする情報や災害、福祉等の情報も掲載することとし、誰もが気軽に利用できる電話帳になることを念頭に作成することとした。

そのため、掲載内容や編集については、若年層から高齢者まで幅広い年齢層の意見を集約す

るため、各種団体からの構成による作成委員会を設置した。

また、世帯の電話番号は、個人情報进行调查することにもなるため、区長会にも依頼し1件1件の確認を区長にお願いし、ふれあい電話帳の改訂版の作成についても区民に周知していただいた。

作成委員会は、計5回開催し、掲載内容の有無や記載方法について何回も議論した。

その結果、掲載内容は、電話番号の他、福祉サービスや防災マップ、また、地区の史跡・名跡なども掲載し、地区民に親しみのある電話帳を作成することができた。



作成委員会の様子

(2) イベント備品整備事業

地区夏まつり事業において、これまで個人からアンプ、スピーカー等の音響備品を借用していたが、旧式であること、又、今後借用が難しくなっていくことから、新たに購入した。また、スピーカー等については、地区体育大会や敬老会でも借用していることから併用して使用していくこととした。

更に、テントについても集落や各施設から老朽化したテントを借用していたが、夏まつりでは、事業拡大のため、新たにテントを購入し、イベントの拡大に努めた。

(3) 登山道周辺整備事業

今回は、まず登山者の水飲み場を確保するため水溜から水飲み場間にパイプを敷設することとした。小葉谷登山コースの途中で水飲み場を確保するために、地元木本地区民が主体となり、里山銀杏峰を愛する会の協力を得ながら、40mと50mの水引パイプ計12本をジョイントし、水溜まで人力で荷上げし敷設していった。総延長は約500メートルの敷設となった。

水溜には、プラスチック枡を重石、針金等で固定し、山水を枡に溜めパイプ取水口には穴を開け大量の水が流れるよう設置した。

険しい山中であるため、重機や車等は入れず、パイプ、部品等運搬には労力を要した。



取水枡設置状況

4 事業の成果

(1) ふれあい電話帳作成事業

作成委員会を設置し、手づくりによる電話帳を作成することで、地区独自の電話帳を作成することができた。また、委員会構成による協働作業により各団体間や世代間の交流が図られた。

さらに世帯の電話番号は、集落単位で作成協力をお願いすることにより、集落のコミュニティや地域協働が醸成され、地域の連帯感が高められた。

地区内の連絡網の整備の外、福祉サービスや

相談・防災、地区住民の共有情報が掲載された電話帳の作成で、緊急時や困惑時などにも活用でき、地区住民が安心して暮らせる一翼を担う電話帳を作成することができた。



ふれあい電話帳

(2) イベント備品整備事業

イベント備品整備による安定した事業内容の充実

① 夏まつり出店協力者団体の増

出店者が、昨年度の12団体から16団体が増え、メニューも増えたことで会場の賑わいが増し、よりグレードアップしたまつりとなった。



出店増となった夜店

- ② 夏まつり規模の拡大による来場者の増
出店者の増大とともに出演団体も2団体増
え、それに伴い来場者も昨年度を約200人上
回る規模へとなり、最後の花火打ち上げまで
多くの来場者で賑わった。



来場者でにぎわう夏まつり会場

- ③ 音響設備の購入による新たな演出
スタンドマイクの新設、モニタースピーカ
ーの導入により、効果音が出せたり、1グル
ープで多数の出演が可能となり、出演者にも
大変喜ばれた、また、観客も大いに楽しんで
もらえた。



夏まつりでのプラスバンド演奏

- (3) 登山道周辺整備事業
今回は、水飲み場の設置のみであったが、登
山者から望まれていたうちの 하나가整備され、

今後は、登山者は給水しながら登山が可能とな
り、気軽に安心して登れるようになった。

また、今回実施したパイプの敷設は、関係地
区住民の協働作業であり、地区住民にとっても
地元山への安全対策の意識や郷土愛が醸成され
た。



飲み水排水口

5 今後の展望

(1) ふれあい電話帳作成事業

地区内限定版の電話帳として地区住民に利用
いただくとともに、福祉サービス・相談の案内
情報や緊急時の対応についても、家庭や区の例
会等で確認いただき、地区住民が安全・安心に
暮らせるよう地域の連帯感や絆を図っていき
たい。

(2) イベント備品整備事業

「上庄夏まつり」は今年度で22回目を数え
たが、前年度の当事業の継続により、次年度か
らはこれまで以上のイベントや出演、出店者
を募ることが可能となった。

本事業でハードの整備ができたので、今後は
企画等のソフトの部分を充実していきたい。ま
た、地区の敬老会や体育大会にもこれらの備品
を活用し、多くの住民が参加できるような企画
や受け入れ態勢を検討していきたい。

(3) 登山道周辺整備事業

登山道整備には多様な整備が必要であるが、本事業では登山者から要望のあった水飲み場が確保できた。

今後も、行政機関と連携しながら、地元住民として、休憩所や案内看板、登山道の整備等にも協力していきたい。

富田地区むらづくり運動推進協議会

1 基本データ

- 地区名 富田地区
- 地区人口 3, 380人
- 面積 21.7k㎡



○地区の沿革

富田地区は、東は九頭竜川、西は真名川の二大河川に挟まれ、日本百名山に数えられる荒島岳のふもとから、東西約4km南北約7kmに細長く広がる純農村地帯。

○実施主体

富田地区むらづくり運動推進協議会

2 現状と課題

富田地区むらづくり運動推進協議会では、市民憲章を基調とし、富田地区の将来にわたって明るく豊かな地域の実現を図るため、地区住民が、自らの手による活気ある地域づくりの推進に努めている。

しかしながら、各集落においては、区長を中心として様々な地域づくりに関する活動が行われていることに対し、富田地区全体となると、「花いっぱい運動」等の環

境美化作業や「とみた夏まつり」以外には特筆すべき地域づくりの活動も見られず、協議会もそれらの運営に終始し、イベント終了後には活動が低調になっている。

この状況から脱却し、地域が一体となって取り組む、新たな地域づくりの方策を模索しているところである。



3 事業の内容

本事業では、富田地区農地環境保全協議会が富田公民館の東側に設置したビオトープを核として、富田跨線橋下の空間を一部利用し、隣接するJR越前富田駅の周辺をも含めて、富田地区住民が集う「安らぎと憩いの場」としての一体的整備を行うこととして3箇年の計画を立てた。



事業の開始となった平成22年度には、むらづくり推進委員や区長会を中心とした地区住民の協働作業により、『ホテルが



たくさん飛び交う空間になってほしい』との富田小学校児童の願いが込められ、「ホテルの里ほのぼのひろば」と命名されたビオトープを見下ろす高台に休憩所となる

あずまや
四阿を設置した。



平成23年度には、当初、ビオトープ観察棟の設置とJR越前富田駅の駅舎周辺に花壇を整備する計画であった。

しかし、花壇の整備予定地はJRが所有する土地であるため、整備後の維持管理費の問題や富田地区環境保全協議会で類似の取り組みが予定されているなどしたため、協議会役員に区長会を加えての協議の結果、ビオトープは富田小学校の環境教育や生活科、理科の学習の場として有効な活用がされていることから観察棟の設置までを行い、その他の整備は、平成24年度

計画を含め終了とし、一応の区切りをつけることとなった。そして新たに、希望する集落を募り、それぞれが抱える問題を住民の協働作業により解決する事業に対して支援を行うこととした。

その結果、ビオトープ観察棟の設置のほか、コミュニティ活動促進用機材購入事業として上野区と塚原区、コミュニティ施設維持管理事業として下麻生嶋区と塚原区、環境美化施設設置事業として森目区の計4集落の事業に取り組むこととなった。

4 事業の成果

①「ホテルの里ほのぼの広場」

観察棟整備事業

10月15日(土)午前8時30分より、桑山広行むらづくり運動推進協議会会長のあいさつの後、観察棟の建て方作業に着手した

当日は、早朝から冷たい雨が降り、肌寒い日となったが、協議会の中核を成す集落推進委員や支援と協力をお願いした区長も参加しての作業となった。



作業には、専門的な知識と技術を必要とすることから、事前に建築部材の刻みと丁張、基礎工事を業者に発注し、また、安全

面から、指導と協力を受けることとなったが、昼食の頃にはあらかじめの作業を終え、若杉会などの協力により準備された豚汁で冷えた体を温めることができた。

昨年に休憩所、今年は観察棟を整備したビオトープは、富田地区農地環境保全協議会が、農村環境の向上と元気で明るい地域づくりを目指して取り組んだ、農地や水環境の保全活動の主要事業として、地区住民の手づくりにより造成された。こうした活動が評価をされ、北陸農政局や県知事からは、優良地区として表彰をされたところである。



また、富田小学校の児童が、環境学習を通してビオトープの計画を作成し、校章を基にしたデザインの造成図を提案するなど、計画の段階から作業に加わり、完成後には、学校近くの河川や湿地で行われた生き物調査で採捕した水生生物の放流や植物の移植を行った。同校のビオトープを核とした環境学習や校区内のクリーン作戦など、環境に関する様々な活動は、

食品容器環境美化協会より、環境美化教育



さらに、ビオトープに隣接する畑では、富田小学校児童が「学校給食畑」として季節の野菜を育てたが、この活動には富田高砂クラブが指導にあたり、地区住民の世代を超えた交流が図られると同時に、賑わいが創出されたところでもある。



地区住民の力を結集して造られたビオトープが、地区共有の学習の場、交流の場となり、今後の地域づくりの拠点となることが期待される。

②コミュニティ活動促進用機材購入事業

【上野区】

- ・会場装飾用ボンボリ 50個

- ・ガーデンテーブルセット 10セット
(テーブル10台/イス40脚)

上野区では、春には「さくらまつり」、夏には「納涼会」、秋には「鎮守祭」、そして冬には「そばまつり」と、一年を通して区民が集い、交流するイベントが活発に行われている。この活動をさらに促進するとともに、特に高齢の参加者が不自由なく楽しめる環境づくりを目的として機材の充実を図った。



【塚原区】

- ・ワイヤレスマイクシステム 1式

塚原区では、田休みや祭礼などを機会に区民の交流事業を展開するとともに、防災意識の啓発を目的に防災訓練を実施しているところであり、それらの際に情報伝達手段として



③コミュニティー施設維持管理事業

【下麻生嶋区】

- ・集落センター敷地舗装

下麻生嶋区では、地域づくりの拠点として地区の集会はもとより、敬老会、青・壮年会、婦人会、子ども会などの団体行事に集落センターが活用されている。加えて、近年は区民の葬儀や近隣区民との交流事業にも利用されるなどし、その目的が多様化してきたことから平成16年に増改築を施したところであるが、更なる利便性の向上を目指し、雨天時の利用や除雪に障害となる土盛り部分を区民の協働作業によりアスファルト舗装を施した。

【作業前】



【完成】



【塚原区】

- ・グランド施設安全柵修繕

塚原区では、共有地をグランドとして整備し、田休み行事や防災訓練を実施するほか、子どもたちの遊びの場となるなどし、地区民が集い交流する場として活用しているところである。このグランドと用水路が面する箇所には、安全施設として金網フェンスが取り付

けられているが、設置後数十年が経過し、網目の破れや雪害による支柱の傾き、それらを起因とした欠損箇所が発生しており、景観を損ねるとともに万が一の際に十分な機能が発揮されないことが危惧されていることから、区民参加による修繕工事を行った。



〔作業前〕



〔完成〕



④環境美化施設設置事業

【森目区】

- ・ゴミステーションの改修

森目区のゴミステーションは、設置後永年経過し、雨漏りが激しく床が常に浸水した状態にあり、衛生的に不良な状態にあるとともに、道路から40m程の奥まった場所に位置しており、積雪時には、特に不便な状況の下にある。放置すれば、区民の環境美化意識の低下が危惧されることから、設置場所を幹線道路沿いに移し、区民参加よりゴミステーシ

ョンの新築工事を行った。

〔作業前〕



〔完成〕



5 今後の展望

富田地区農地環境保全協議会が造成したビオトープに、むらづくり運動推進協議会集落委員を中心とした地区住民の協働作業により休憩所と観察棟が整備され、富田地区住民が集う「安らぎと憩いの場」が完成した。

既に、環境学習の場として、また、自然体験活動の場として富田小学校児童の積極的な利用がなされ、子どもたちの弾んだ声が聞こえ、楽しそうな笑顔が見られる、活気に満ちた場所となってきた。

先に開催された集落推進委員会における来年度の事業計画では、ビオトープの存在を地

区住民に周知するとともに、地域づくりの拠点として更なる活用がされることを目的に、ビオトープ帯の風景を題材としたフォトコンテストが提案された。

平成24年度の交付金事業では、集落が抱える問題を住民自らが協働の力で解決する場合に支援をすることとしているが、今年度に先行して実施した集落を参考にしながら、未実施の集落では、自分たちも遅れてはならないというような機運が高まり、自らの集落の課題解決へ向けた動きが活発化してきた。

こうして、一歩ずつではあるが、地区住民が参加し、自らの力でふるさとに活気を再生しようとする動きが見られるようになり、地域の活性化に繋がることが期待される場所である。



ふるさと阪谷をよくする会

1 基本データ

○地区人口 1,692人 (H23.1.1現在)

男815人：女877人

○面積 36.28km²

○地区の沿革

阪谷地区は大野市の北東部、白山山系の経ヶ岳の麓に位置し、西は九頭竜川を挟んで富田地区、北は勝山市、東は五箇地区に接している。集落は18。昭和29年の町村合併により、阪谷村が大野市となる。

標高250m～500mの中山間地域で、大野市の中でも雪が多い地区である。

面積の2/3は山林。農地は土地改良が進み、広大な棚田となっている。

福井県下スキー場の発祥の地、六呂師高原スキー場を始め、六呂師高原には、220ヘクタールを有する奥越高原牧場、自然保護センター、青少年自然の家等の県の施設や、トロン温浴施設うらら館、ミルク工房奥越前等の市の施設を有する。

平地より気温が1度から2度低く、経ヶ岳(1,625m)から吹き下ろす冷たく強い山風は、虫を追い払うのに効果があり、昔から有機栽培の土壌が培われてきた。そんな土地柄もあり、平成12年「スターランドさかだに」の建設を機に、「有機自然農法研究会」や「家庭菜園の味グループ」等、有機農業グループが活動を開始し、更に平成20年度には、国の「地域有機農業推進補助事業」の認定も受け、本格的に有機の里づくりが始動した。

○実施主体 ふるさと阪谷をよくする会

2 現状と課題

1) 人口減少

ここ数年来約30人前後の減で推移してきた人口が、昨年は一気に50人を超え、減少に拍車がかかっている。

基準日	人口	前年度に対する人口増減
H19.1.1	1,828	△33
H20.1.1	1,782	△46
H21.1.1	1,759	△23
H22.1.1	1,722	△37
H23.1.1	1,692	△30
H24.1.1	1,634	△58

減少の内訳を見てみると、出生は5名と少なく若い世代が少ないことがうかがえる。また転出は53名で転入の26名の2倍となっており、若い世代の流出がうかがえる。

地域の担い手となっている高齢者も高齢化はうち止まり傾向で、自然減少はここしばらく高い割合で継続されていくであろう。

H23.1.1～H24.1.1の1年間の人口増減の内訳					
転入	出生	転出	死亡	転居	人口増減
26	5	△53	△34	入9 出△11	△58

そんな中、人口減少を補う手段として、交流人口を増やすことが、地域の元気継続のキーワードになってくると思われる。

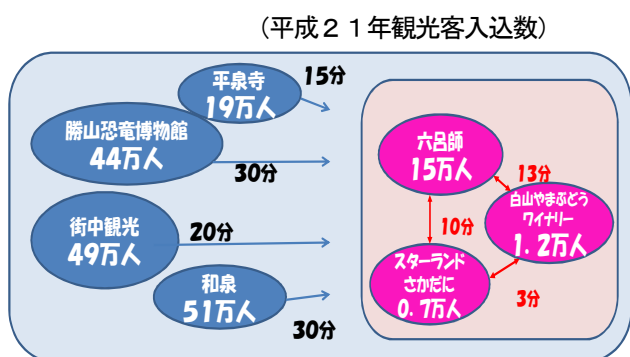
いかに他地区に誇れる産業、イベント、文化を創造し、活性化させて、生産人口の流出を食い止めるか、いかに交流人口を増やし地域を活性化させるかが課題である。

2) 点在する観光施設と息づく山村の暮らし

地区内には、農業体験やそばうち体験ができる「スターランドさかだに」をはじめ、多くの体験施設、観光施設が立地している。

また、脈々と受け継がれた田畑を守り続けている知恵深きお年よりが多数暮らしている。これら体験施設、観光施設と人的財産を結びつけたエコツーリズムが今後阪谷地区の活性化のキーポイントになってくると思われる。そのためには、地区内各施設の連携と交流に対する意識の啓発、さらに魅力的な体験プログラムの開発が必要である。

3) 近隣の観光地から車で30分以内の距離



大野市街地、勝山市、和泉地区から車で30分以内の当地区。このような恵まれた立地条件を生かし、まず、大野市街地、勝山市、和泉地区に來られた観光客に阪谷に立ち寄っていただきたい。そのためには、安心安全な「有機の里」としていかに「阪谷」という名をブランド化し知名度を上げていくかが今後の課題である。

(3) 事業の内容

昨年に引き続き①有機の里づくりと②陶芸の里づくり、さらに加えて③加工品の開発に取り組んだ。

①有機の里づくり

有機の里を体感させる体験ツアー（1日コース・ナイトコース）のモデルコースを実施した。



(こだわり野菜を食するついでを楽しむ1日体験バスツアーの参加者)



(そばうちを楽しむナイト体験バスツアーの参加者)

また、土産の「こだわり野菜」を含め、体験内容と農産物についてのアンケートを実施した。

②陶芸の里づくり

毎月第1・3金曜日に中村鐵遷氏（勝山市在住）を講師に招き陶芸教室を開催した。自主グループ「越前おおの阪谷桃木釜」が立ち上がり、大野市文化祭、阪谷地区文化祭に作品を出品した。

中古ではあるが、大型の陶芸釜も購入した。



(真剣に作陶に打ち込む受講生)



(購入した中古の陶芸釜)

③加工品の開発

阪谷地区内で生産されたこだわり野菜を用いて試食会を繰り返し実施した。物産展や商談会に参加し、その会場で加工品の試作品のモニタリングを実施した。

また、スターランド特産加工部会を発足させ、スターランドの調理室を菓子製造の許可を得た。



(ひまわり油ドレッシングの試食会)



(いろいろな物産展に積極的に参加)



(越前市の加工施設に視察)

視察研修も実施し、試行錯誤しながら加工品づくりを繰り返した。

さらに、有機の里のマスコットキャラクター「さかざきんちゃん」のマグネットシートを作成し、イベント参加時や商談会に参加する時には、自動車に貼って出かけ、有機の里阪谷のPRに努めた。



サイズ
(30cm×37cm)

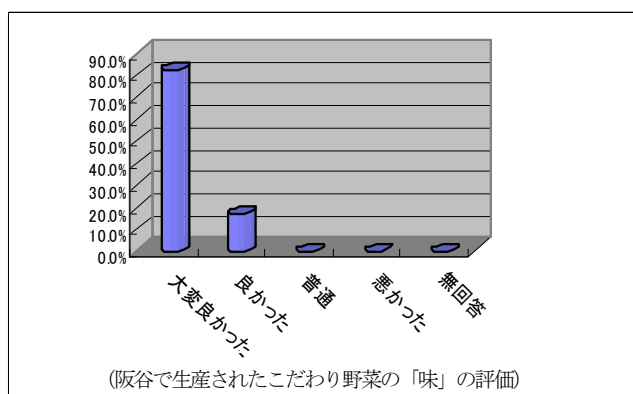
4 事業の成果

有機の里づくり

参加者の体験アンケート並びに農産物のアンケートを実施した。体験ツアーでは、約4割の方が「大変よかった」3割の方が「よかった」と回答した。「近くにこんなに良い所があるとは知らなかった。」「地域全体で取り組んでいる姿に感動した。」等、嬉しいメッセージを多くいただいた。

土産のこだわり農産物では、約8割の方が「大変おしかった」1割の方が「おいしかった」と回答しており、阪谷の魅力が発信できたとともに

に、グリーンツーリズムの可能性を地域住民に示すこともできた。



今年2月、越前市のバス会社から『「こだわり野菜を食するつどい」をバスツアーに組み込みたい。』と嬉しい申し入れがあった。

「こだわり野菜を食するつどい」が、商品として認められたということだ。手作りで始めたイベントが4年の時を得てここまで育ったことは大きな成果であり、関係者の大きな自信と希望になった。

陶芸の里づくり

大野市文化祭や阪谷地区文化祭に出品し創作意欲が高まりつつある。

趣味の作陶の範疇を超え、土産品としての活用、こだわり野菜を食するつどいやスターランドそば処の器としての活用、スターランドでの体験メニューとしての活用等、関係者の士気が高まっている。

加工品の開発

地元産そば粉と、地元産ひまわり油を用い、第1号特産品としてそば菓子「そばつつえる」が開発された。現在第2号「まめずきん」や「味みそ」も商品化に向け試行錯誤中である。商談会にも積極的に参加し、PRに努めた結果、問い合わせも多く商談が成立し始めている。



(商品化した「そばつつえる」)

5 今後の展望

「有機の里づくり」においては、地区内並びに奥越地区内施設と連携した体験ツアーが季節ごとにそれぞれの形態で実施され、交流人口が増え、加工品、特産物の販売による消費が生まれ、地区内が活性することを期待したい。

そのためには、正確にニーズを把握することが重要になってくる。継続的にアンケートを実施し、累積、分析し、的確にニーズを探っていくなくてはならない。

さらに、質を高めるためには、地区住民の「おもてなしの心」の醸成が大切であり、「おもてなしの心」の育成には公民館を中心とした社会教育が重要になってくる。

「陶芸の里づくり」においては、いよいよ拠点の整備に取り掛かっていく。拠点整備後は、1体験プログラムとして交流人口増加の一翼を担いたい。

将来的には陶芸については、「阪谷焼」を誕生させたいと意気込んでいる。

「加工品の開発」においては、この春より、こだわり栽培の「ひまわりの種」と「大豆」を全量買い取ることを地区民に呼びかけることになった。消費拡大により、加工品に使用するこだわり野菜が不足することが予想されるからだ。有機の里阪谷の農作物がブランド化し、さら

に需要が高まり、農業所得が少しでも高まることを期待したい。

交流人口が増え、消費が生まれ、産業が生まれ、市民力が高まり、地域が元気になる。「こだわり野菜を食するつどい」「こだわり農産物の加工品」「陶芸」が「有機の里」をキーワードにつながり始めた。そこから光が生まれようとしている。

観光とは光を観ること。光のあるところに人々は集まる。光を生み、育て、磨きをかけるのはそこに住む人々。個々が、団体が、それぞれの役割をしっかりと認識し、老若男女一丸となってふるさと阪谷の明日への夢に向かって努力していかななくてはならない。

五箇地区むらづくり推進協議会

1 基本データ

- 地区名 五箇地区
- 地区人口 65人
- 面積 146km²
- 地区の沿革

五箇地区は、市街地から約8km東南の位置にあり、西は「日本百名山」の「荒島岳」、東は赤兎山と白山連邦、岐阜県に接し、面積は146km²と広大な林野を占める地域。上打波、下打波、東勝原、西勝原の4集落からなっている。

- 実施主体

五箇地区むらづくり推進協議会



2 現状と課題

地区内には、スキー場（現在は閉鎖）やキャンプ場のアウト・ドア・レジャー施設が整備されるとともに、景勝地「刈込池」や「仏御前の滝」、九頭竜川の「魚止め」等、風光明媚な景色が点在しており、訪れる旅行者を目的とした民宿業も盛んに行われていた（現在は1軒が営業）。

かつては、小・中学校やJAの支所も置かれていたが、相次ぐ災害やダム建設の移住によ

る人口減少や各組織の再編計画の中で、順次役目を終え廃止されていった。



現在は、JR勝原駅のある西勝原区を中心に、東勝原・上打波・下打波の4集落に36世帯65名が生活をしている。また、無雪期には、何人もの村人が市街地から畑や山仕事のため通ってきており、神社では祭りも催されるなどしているが、通年在住者のうち65歳以上が42名を数え、高齢化率（65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合）の進行が64.6%と顕著であり、いわゆる“限界



集落”となっている。2007年に国土交通省から公表された限界集落の実態によると、全国には7,878ヵ所もの限界集落が存在し、今後さらに増加すると記されている。過疎の問題が言われて久しいが、当地区は市街地からも遠いこともあり、その解決策を見いだせないまま人口流失が続き、少子高齢化社会が到来してしまった。

このような中、地区内では、むらづくり推進協議会が実施する「花いっぱい運動」により、JR勝原駅周辺を季節の花で飾り、五箇地区への訪問者を出迎えたり、近所の婦人に



よって30年ほど前から植樹された花桃並木が、春になると“桃源郷”として注目を集め、



満開の季節には遠く中京や関西から観光客が訪れるまでになるなど、「豊かな自然を活かした交流」を目指して、地区住民が一体となり“ふるさと五箇”の活性化に向けて取り組ん

でいるところである。

3 事業の内容

今では雑草が生い茂り、埋もれかけている湧水地や不法投棄されたゴミに汚された用水路に階段や遊歩道を設け、来訪者が清流を楽しめる親水空間として再生するほか、“桃源郷”と表現される花桃並木を核に、地区全体に花が咲き誇る花木の里づくりを、住民協働による故郷の環境保全と位置付け、「豊かな自然を活かした交流人口の増加」を目指し、地区の活性化につなげていくものである。



【八幡神社下湧水地の再生 (H22)】



【花桃の若木保全 (H22)】

平成23年度には、「赤兎山」や「刈込池」、「秘湯の宿嶋ヶ湯温泉」へ通じるとして、観光客の利用が多い県道沿いに位置する東勝原

区の広場にサルスベリを植樹し、景観の向上を図るとともに、平成22年度に引き続き、花桃やツツジ、ヤマボウシなど約150本の若木の保全活動に取り組むこととした。

4 事業の成果

東勝原区でのサルスベリの植樹については、元来、同地区の壮年会と婦人会からなる睦会が管理をする広場に低木が植樹された経緯があったが、市内でも有数の豪雪地帯であるがゆえに、雪害により折損するなどして成長が阻害されてしまい、やぶ化とともに絶えたことから、3mほどに成長した樹を選定した。

作業は、むらづくり推進協議会会長をはじめ、東勝原区からは、ほぼ全員の3名の住民が顔をそろえ、造園業者の指導により、植え込み場所の穴掘りから始まった。



スコップとツルハシを使っての手作業となったうえに、ティッシュペーパーの箱ほどの石を多数、掘り起こさなければならず、高齢の住民にとっては大変な重労働となったが、堆肥を施した穴に樹を定着させ、鳥居に固定する最終作業の頃には、満面の笑顔で、花をつける頃を待ち望んでの話に花が咲くこととなった。



8月には、紅の濃淡が美しい花が咲き、往来する多くの登山客の目を楽しませてくれることを願い作業を終了した。



花桃やツツジ、ヤマボウシなどの若木の管理作業については、雪囲い材料を保管する木棚を組み立てることから始められた。

若木とはいえ、150本分の雪囲い材料ともなると相当の数となり、その保管場所に苦慮していたところであったが、建築現場で見かける足場用の単管を組み上げ、五箇地区の積雪にも耐えられるように頑丈な仕上げとした。



次に、近年、花桃が満開を迎える頃には、近隣の地域はもとより中京や関西方面からでも大勢の観光客が訪れることから、花桃並木に続く園地の整備に取り組みこととした。粉碎した瓦や木片で園路を形成し、散策しやす

い環境を整えるとともに、河川との境界にはロープ柵を施し、安全面にも配慮をした。

平成24年春に花桃イベントの開催へ向けた準備が、地区住民に五箇地区にゆかりのある人を加えた有志により進められていることから、園地の整備は、今後の展開に合致したものとなった。

12月4日（日）には、地区住民総出の冬支度作業に合わせて園地の若木に肥料を施すとともに、雪囲いを行った。好天には恵まれたものの九頭竜川から吹く風は冷たく、本格的な冬の到来が間近と感じられるなかでの作業となったが、こうした共同作業は、本来の目的である若木の保安全管理ばかりではなく、作業の手順や支柱の立て方、荒縄の結び方等、年長者から次世代へ術が受け継がれる機会でもあり、住民同士の結束が深まることを感じられる場ともなった。



5 今後の展望

長い間に埋もれてしまい、地区住民でさえも忘れかけていた財産に、再度、光を当てるとともに、新たに誕生した財産には更に磨きをかける、地区の“宝”づくりがスタートした。

今後は、この“宝”が光り輝き、そして、五箇地区へ人を引き付ける魅力となるように受け継いでいかなければならない。そのためには、むらづくり推進協議会を中心とした、地区住民の手による適切な維持管理が不可欠である。『自分たちの共有の財産』であるという認識と、これを守り育てるという取り組みが、“ふるさと五箇”の活性化となり、交流人口の増加にもつながることと思われる。

幸いにも、住民自らが手弁当によるイベントを企画し、自分たちの“宝”を情報発信する動きが芽生えてもきた。

地区内には、少し手を加えれば再生可能な埋もれた場所が、まだ残っており、これらに手を加え、ひとつの導線として描くことで、昔懐かしい風景に癒される空間を演出し、都市住民に提供できれば、再び、賑わいが創出される。

過疎化が進む五箇地区には、自然がそのまま残されていることが最大の強みである。

和泉自治会

越前おおの・九頭竜 花桃回廊プロジェクト

1 基本データ

○地区名 和泉地区

○地区人口

575人（平成23年6月30日現在）

○面積 332平方キロメートル

○地区の沿革

和泉地区（旧和泉村）は、福井県の東端に位置し岐阜県に境を接し、面積の約3分の2が山林であり、四囲山岳を形成し、その中央を岐阜県境に源を発する九頭竜川が東西に貫流している。また九頭竜川をせきとめた九頭竜ダムを始め、大小複数の人造湖を形成している。



九頭竜ダム湖

人口は昭和40年に5,723人であったが、昭和43年の九頭竜ダム完成や昭和62年の日本亜鉛鉱業中竜鉱山の採掘中止などが影響し平成2年には846人にまで激減した。この人口の絶対数の少なさ、豪雪地帯・山村地域という地理的条件、工業用地条件の欠如による魅力ある職場の少なさ、都市的生活環境整備の立ち遅れ等による若者の不定着により過疎化が進んできた。

このような中、旧和泉村では地域の特性を生

かしたむらづくりの理念のもと観光と農林水産等地域産業の連携による内発的地域振興を目指してきた。特に観光には力を入れ「観光立村」を掲げ、昭和40代後半より多くの観光施設の整備を行ってきた。「九頭竜国民休養地」や「前坂家族旅行村」、「天狗岩ファミリーパーク」などの保養施設やキャンプ場、また「九頭竜スキー場」も整備してきた。さらに平成に入り民間のスキー場（福井和泉スキー場）がオープン、さらに下山地区では、平成元年に試掘された温泉を利用し「九頭竜保養の里」を整備し、日帰り温泉施設、ホテル、コテージなどのリゾートゾーンを形成してきた。

今年で32回目を迎えた「九頭竜紅葉まつり」は、10月に九頭竜国民休養地を会場として行われ、県内でも有数のイベントとして定着し今年度も2日間で約6万人の来場者で賑わった。同会場では5月には「九頭竜新緑まつり」も開催され同じく多くの来場者が訪れている。



九頭竜紅葉まつり

交通網も岐阜県側で国道158号線に繋がる東海北陸自動車道が整備され、中京圏からの距離も短縮され「福井県の東の玄関口」と位置付けられるようになった。

和泉地区は中世から穴馬郷と称せられ、南北朝時代から江戸時代を通じて次々と支配者が変わり、天領として明治時代を迎えている。明治22年町村制実施に伴い上穴馬村、下穴馬村に

分かれ、その後昭和31年9月30日に合併して和泉村となり、さらに昭和34年10月14日に石徹白村の一部を編入した。そして平成の大合併により平成17年11月7日に大野市と合併し現在に至っている。

○実施主体

以前より地区内に、個人で花桃の苗を植樹している方がいたが、ある民放ラジオ局がPRと地域貢献を兼ね、何かしたいということから、地区の方に相談があった。その際に花桃の話が浮上し、企業と地元住民が協力し地域の活性化を目指すべく、花桃の里を作ろうということで話しが進んでいった。

そこで地元の有志を募ることとなったが、個人的にお願いにいくも、なかなか人材が集まらず、自らの手で和泉地域の活性化とコミュニティの形成を図ることを目的とした自治組織「和泉自治会」に話をして賛同を得ることとした。

和泉自治会の賛同も得て、平成21年11月18日に民間企業と地元住民による自主事業団体「越前おおの・九頭竜 花桃回廊実行委員会」が、この地域に花桃の植樹・育成事業を図ることにより、観光文化拠点としての地域づくりに寄与することを目的に発足した。

これらを経て和泉自治会では、平成22年4月27日に長野県上伊那郡阿智村の「花桃の里」への視察研修を実施した。特に月川温泉「野熊の庄 月川」周りの花桃は見事で、多くの観光客が訪れ、イベントも開催されていた。また国道256号線沿いの「花桃街道」にも多くの花桃がみられ、山際や個人宅の庭などにも植栽がみられ、地区全体が花桃で盛り上げようという機運が見受けられた。また、その地区も平成4年にインターチェンジが整備された場所ということもあり、和泉地区と似たような状況にあっ

たため大変参考となった。

このように和泉自治会も実行委員会の目的に賛同し共通認識をもつようになり、実施主体である実行委員会の事業推進に協力をする事となった。



「花桃の里」視察

2 現状と課題

和泉地区は、合併後の6年間にも人口が減少しており、731人（平成17年10月）から565人（平成23年10月）へと△166人（△22.7%）となっている。さらに大野市街地から約30kmの距離があり行政サービス低下への懸念や若者の流出により高齢化が進み地域力・マンパワー不足による地域の衰退、経済情勢の悪化による観光客の減など、当地区の将来への不安が増大している。

合併前は小さな自治体であり、昔から電源開発のダム事業や中竜亜鉛鉱業株式会社の鉱山など大きな税収等の恩恵を受け、決め細やかな行政サービスを受けていた。このような状況もあり住民が自ら行動を起こし自らの手で事業を行うという意識が薄く、行政に強く依存している状況であったといえる。

合併を機に、このような状況は一遍し、各種補助金の削減やこれまで無料だった公共水道料金の発生など、少しずつではあるが依存体質から脱却しつつある。

しかしながら、今も自発的に物事を行うことや個人負担を伴うことに戸惑いを感じることもあり、さらに皆を率先していくリーダー的人材が不足している感がある。

3 事業実施にあたって

和泉地区は中京方面からの玄関口として、大野市さらには福井県にとっても最重要な地域であり、近い将来の中部縦貫自動車道の開通に伴うインターチェンジの完成などにより交通の拠点となる。



中部縦貫自動車道予定（赤線）

平成21年3月の大野東～和泉 IC 間の新規事業化について、平成23年12月には和泉 IC～油坂峠間の新規事業化が決定するなど着々と開通に向け進展しているところである。

開通に際し、和泉地区が単なる通過ポイントとして埋没することなく、中京方面などから福井県を訪れた方が最初にインターチェンジをおりて立ち寄っていただける「観光拠点」を創造することが重要だと考える。

そこから地域内外の交流が生まれ、地域住民の自発的な意欲・行動が促され、地域力・市民力が向上していくことが期待できる。

その「観光拠点」は和泉地区の自然豊かな風土にマッチした心満たされる場所であり、癒しや休息、おもてなしの優しい心が表現された場所であればいけない。

花木の植樹により花木で育む優しさと癒しを

表す和泉地区ならではの「観光拠点」を創造することのみならず、継続的な育成事業により地域の活力を生む「継続的なふるさとづくり」が可能になる。

福井に入るとき帰るとき必ず立ち寄りたくなる。そんなエリアの創造を目指す。

4 事業の内容

- ① 平成22年春より3ヵ年計画（年間500本）にて、和泉地区で花桃の苗木の植樹を行う。
- ② 花桃の育成管理を行う。
- ③ 植樹は広く一般より参加（有料）を求め併せて集客イベントを行い、地元物産のPRや販売の機会を創出する。

5 事業の成果

①花桃の植樹

昨年度は、平成22年5月29日（土）30日（日）の両日、同地区の九頭竜保養の里、九頭竜国民休養地、道の駅九頭竜周辺に約460本の「花桃の苗木」を植樹し、県内外より2日間で約1,000人の参加者が集まった。また道の駅周辺や前坂地区、下半原地区、大納地区などへも10本前後の植樹を行い、和泉地区全体で花桃を楽しんで回れるような地域を目指している。

今年度は平成23年5月28日（土）、和泉前坂家族旅行村において植樹イベントを開催し、297名の参加をいただき、約350本の苗木の植樹をおこなった。



イベントステージ

このイベントのほか、実行委員会で川合地区、角野地区、大納地区などへ約150本の植樹を行った。今年度の植樹イベントのPRとしては昨年の参加者へのダイレクトメールのほか、市内外のショッピングセンター等へのチラシの設置、ラジオ番組でのイベント紹介などを行った。参加者は昨年のリピーターが多く約70%を占めた。除々にではあるが、これまで和泉地区へ訪れたことがなかった人たちにも、当地区へ来てみようというきっかけが芽生え始めているように思えた。遊びに來ただけでは、あそこへ行ったことがあるという思い出が残るだけであるが、ここに自分の植えた花桃があるということから、再びこの地を訪れてみようと思う気持ちが生まれ、少しずつ愛着もわいてくるのではないだろうか。



植樹風景

植樹した苗木の添え木にはナンバープレートがついており、自分が植樹した木が分かるようになっている。



設置されているナンバープレート

実際に、昨年は植樹の後もその場所を訪れ、自分の植えた苗木の周りの草刈をする人や、和泉地区の新緑まつりや紅葉まつりに訪れた人が自分の植えた花桃を見て帰ることもあった。一部の苗木には、ちらほらと花がついているものもあり、将来多くの花が咲き誇るよう期待に胸を膨らませていた。

植樹イベント当日は、植樹のあと流木アートやビンゴ大会などで楽しい時間を過ごし、また和泉の食材を生かした昼食も堪能した。今年度は「しし肉のスモーク」「しし汁」「岩魚塩焼き」「舞茸弁当」など、参加者らは植樹と併せ和泉の食材の魅力を存分に満喫していた。

参加者らはこのイベントを通して和泉地区に対する思いを深め、強く心に残る1日になったのではないかと。これにより当地区の魅力が地区外にも発信され、大野市の新たな観光地の創造に手ごたえを感じた。

和泉の食材を生かした昼食の提供



しし肉のスマーク



岩魚の塩焼き

②花桃の育成管理

草刈、追肥、雪囲いなど植樹後の管理も非常に大切であり、実行委員会のメンバーやボランティアを募集するなどして随時行ってきた。

雪解け後の4月23日には、昨年植樹し、秋に雪囲いをした花桃の雪囲いの取り外し作業を行った。36名の参加があり豪雪にも負けず無事冬を越せた苗木に一安心し、更なる成長を願い追肥も行った。また8月1日には、生育調査と消毒を行い苗木の状況を確認した。11月5日(土)には37名の協力を得て、来たる冬の雪に備え苗木が雪で折れないよう雪囲い作業を行った。参加者らは専門家の指導を仰ぎ、竹と荒縄を使って雪囲いを設置した。昨年も同作業を行った方が多く、2年目ということで昨年よ

り皆手際よく作業を進めていた。特に荒縄で枝を束ねて縛る際の結び方「男結び」にも慣れてきており、すばやく作業を進めていた。本数が多くかなり大変ではあったが、参加者らは一本も雪に負けて折れたりしないよう丁寧に作業を行い、将来この地域が花桃でいっぱいになり、多く方がこの地を訪れてもらえることに思いをはせていた。



雪囲い作業

これらの作業を行うにあたっては、苗木の本数も多く実行委員会のメンバーだけでは実施が困難であり、造園業者などに依頼する資金もないという理由もあるが、この管理を通じて地域の活性化に繋がっていくことを期待し、ボランティアの花桃管理グループ「花桃ガーディアンズ」を募集して行っている。

和泉地区の住民だけでなく、地区外より多くのボランティアを募集することで、多くの方に和泉地区を知ってもらい愛着が生まれる。さらに地元住民と触れ合う機会を創出することが大切であると考えた。

実際、ボランティアには和泉地区以外の参加者が多く、地元の方や初めてお会いした方なども協力して作業を行い、おしゃべりから小さな交流が生まれていた。

これを機に地元住民の交友範囲も広がり、さらに外部の情報を得ることや地域外の人の意見

を聞く事で、今後の地域の発展また地域住民の意識改革に繋がってくるのではないかと感じとれた。

今年度も昨年ほどではないが、かなり雪が多く、花桃の苗はほとんど見えず雪囲いの支柱の竹が雪の上に見えているという状態である。



雪の中の苗木の様子

6 今後の展望

花桃の見頃は5月であり、開花から約2週間花を楽しむ事ができる。この3年間で和泉地区の広範囲に植樹を行うが、和泉地区内でも標高差がかなりあり、標高の低い場所から咲き始め、順次標高の高い場所へと開花が進んでいくため、より長く花を楽しむことができるようになる。

当地域は福井県の東の玄関口として、福井県に訪れた際、和泉地区のインターチェンジで降りたくなる魅力ある地域となり、花桃回廊目的の観光客が増加していく。また植樹参加者が当地区に愛着をもちリピーターとなって訪れるようになる。これらにより地区内での消費額も増加し、地域の産業・経済の活性化が図られる。

さらに、ボランティア団体「花桃ガーディアンズ」が花桃の育成管理を継続していく中で、その活動を通じて新たな交流やこれまで以上の深い絆が芽生え、また和泉地区の知名度が上がることにより人々の意識も変わり、地域の活力を生み出す原動力となり、より活発に・より自

発的に地域づくりに取り組む人々の輪が広がっていく。

7 地域力向上へ

平成17年の合併に伴い地区住民の間では、行政サービスの低下が懸念されている。これまで小さな自治体のため行政を身近に感じ頼りすぎている部分もあったと思うが、すぐに考え方をを変えることは難しい。

この事業が行政に頼らず自主的に地域づくりに携わっていくという意識改革への転機になることを期待したい。

その結果、地域にリーダー的存在の人物が発生し、そこへ自然と人が集まり結束し、地域を牽引する大きな力へと変わっていく。すなわち地域力が向上していくことに繋がってくるものと確信している。